

長門湯本温泉の「深川十勝」題の詩歌

——毛利敬親『露山集』・村田清風『月波楼集』など

小野美典

長州藩十三代藩主毛利敬親は、『露山集』という家集を残しています。わずか三十首からなる小さな家集ですが、幕末に長州藩の舵取りを任されていた藩主の作にふさわしく、述懐歌とともに藩内外での見聞を題材とした歌も見られます。その詠歌は静謐かつ清澄なものが多く、激動の世の中を生きる藩主（政治家）とはかくあるべきものか……と、忙中に閑雅を忘れなかつた敬親に、新たな思いを抱かせられる家集でもあります。歴史史料としても、また藩主の文芸資料としても興味深い小品です。その中（18・19番歌）に、長門湯本温泉を訪ねた時の詠歌二首があります。

湯浴みに深川にまかりける折、「東廬山鐘」といふことを詠める

18 山寺の露と消えにし亡き人のかたみとぞ聴く入相の鐘

同じ折、「千代橋月」を

19 山里のあはれをそへて橋の上に松の葉越しの月を見るかな

18番歌の詞書の「東廬山」は名刹大寧寺のこと。その山号は「瑞

雲山」ですが、中国の名峰廬山①に對して「日東（日本）の廬山」の意で「東廬山」とも呼ばれてきました。陶晴賢の謀叛により、大内氏最後の当主大内義隆は、この寺の炎上とともに露と消えてしまふ。その往時を追懷して詠まれたのが18番歌です。歌意は「ここ大寧寺で露と消えていった亡き大内義隆の形見として聴く。入相の鐘を」。

ちなみに、義隆の辞世の歌は、「討つ人も討たる人も諸共に如露亦如電 応作如是観」と言われていますが、この下の句は「金剛般若波羅蜜多經」の偈頌「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是観（一切の有為の法、夢幻泡影のごとし。露のごとく亦た電のごとし。応に是のごとき観を作すべし）」の後半に依っています。もちろん経典の前半部も踏まえて義隆歌は解釈すべき。「この世のはかなさは、夢まぼろし、水泡や影のようなもの。討つ者も討たれる者も共に、露のごとく稲光のごとくはかない……。当然そのように世を觀じるべきだ」。義隆の最期は『大内義隆記』や『陰徳太平記』巻十九に詳しいですが、江戸時代後期に編集された『大内盛衰記』（山口市乗福寺藏本）を紐解いてみましょう。「主従以下、

大寧寺本堂の仏前に威儀を正して列座し、義隆から辞世を染筆。倚雪（異雪）和尚の一偈一喝の後、皆が一斉に自害した」と、武将の最期が見事に描かれています。

冒頭に挙げた18番「山寺の」の敬親歌は、この義隆歌の下の句をも踏まえて作られています。「東廬山鐘」という題から、「大寧寺↓大内氏滅亡の地↓大内義隆」と連想が進み、義隆の辞世歌が頭をよぎる……。「山寺の露と消えにし」という過去の大内氏滅亡の歴史を想起した中で、鐘の音によって現在に引き戻されるのです。過去と現在の対比に、義隆辞世歌（とそれに伴う逸話、更には倭さの象徴「露」の再度の利用）を絡めて、聴覚（鐘の音）での把握をなす。大内氏の栄華と滅亡の絵巻が模倣としている中、鐘の音が響いている。体言止めも効果的です。余韻・余情が漂い続けます。和歌が余技でしかなかったはずの藩主の作なのに、誠に味わい深い歌と言えましょう。

ところでこの大寧寺の鐘を題として、敬親に仕えて藩の財政改革をなした村田清風も漢詩を残しています（書き下し文は稿者に依る）。

大寧寺鐘

遠図誰建寺（遠図誰か寺を建てたる。）

扼此最高峰（扼るところ此の最高峰。）

事去千年後（事去りて千年の後、）

鐘猶猶叩鐘（鐘猶猶は鐘を叩く。）

こちらでも過去の歴史から句を起こします。しかし、大内氏滅亡の

時といった過去の一時点ではなく、大寧寺創建の時に思いを馳せます。「はるか昔のまた昔、一体誰が遠い先まで見通して遠大な構想のもと、この素晴らしい峰に寺を建てたのか……」。『遠図』とは遠大なばかりごとの意です。転句で、読む者を一瞬のうちに現在に引き戻します。「そして、ここには鐘僧（小僧）が、依然として昔と同じように鐘を撞いている」。結句末の「鐘」が余韻を響かせているのは、敬親歌と同様です。

敬親歌が自らと同じ大名の最期の秋に思いを馳せるのに対して、清風詩は大寧寺創建の時から思いを起こします。人の上に立つ者（敬親）の、人そのものへの暖かい眼差しと、有能な官吏（清風）の、人の営みへの冷静な分析とでも言えましようか……。

ところで、注目したいのは、この「東廬山鐘（大寧寺鐘）」という題です。大寧寺の梵鐘は現在、長門市の有形文化財に指定されていますが、境内にはまだまだ題とするに足る景物がたくさんあります。なぜ、敬親・清風が同一題で詩歌を詠じているのでしょうか……。

実は、この「東廬山鐘（大寧寺鐘）」という四字題は、「深川十勝（涪溪十勝）」題の一つであり、近世後期の一時期、長州藩内での題の詩歌が盛んに作られた痕跡があるのです。今は、この「深川十勝・涪溪十勝」という名称すらほとんど忘れ去られているようですが、長門湯本温泉の名所・旧跡を挙げたものとして、再び思い起こされてもよいのではないのでしょうか。

前掲の清風詩は、『山莊叢書 清風詩集』に収められています。この詩集は、清風二十四歳の時から安政二年（一八五五）七十三歳で没するまでの作がほぼ年代順に配列され、その中に「壬子仲夏初

二、涪溪十勝応ニ内命ニ而賦」として、「大寧寺鐘」を含む十勝詩が掲載されています。「壬子仲夏初二」は嘉永五年（一八五二）五月二日。「内命に應じて賦す」とありますから、高貴な方からの私的な依頼で詠んだことがわかります。

興味深いのは、十代藩主斉熙の三男順信の長男の順明（禎之丞）です。敬親に嫡子がいなかったため、広封（徳山藩主毛利広鎮の子、後の十四代元徳）とともに嘉永四年十一月に敬親の養子になっています。実際は広封が五日早く養子となり、後に長州藩主となりますが、禎之丞と呼ばれていた順明は嘉永五年夏、長門湯本温泉に湯治に訪れています。それは山口県文書館蔵『禎之丞様深川御湯治沙汰控』という資料からわかるのですが、当時、禎之丞は十四歳でした。もしかしたら、この時、清風が内命を受けて禎之丞に十勝詩歌を献呈したのかもしれませんが、資料的裏付けができませんでした。

なお、清風への下命者が藩主敬親だったら興味深いのですが、長門湯本温泉での藩主の湯治は寛政十年（一七九八）の九代斉房を最後になくなったと指摘されています。近世後期には、萩と山陽道を結ぶ萩往還に近い湯田温泉での入湯が諸々の点で好ましくなったからでしょう。ただし、冒頭の『露山集』の二首は、明らかに敬親が深川の地で詠んだ歌です。湯治ではなく、領内巡視ほかで当地に立ち寄ることはあったでしょう。その時の詠作と思われるかと。となると、嘉永五年五月二日頃に敬親が当地に立ち寄っていて、清風に十勝題詩歌の詠作を命じた可能性も皆無とはいえません。真相は藪の中です。

さて、清風の漢詩も佳いのですが和歌を挙げます。清風の自撰歌集『月波楼集』の嘉永五年五月頃の作に「深川十勝」と題する和歌があります。恐らく先の漢詩「涪溪十勝」と同じ時に詠まれたものでしょう。「涪溪」という語が漢語的で堅いので、和歌の方は「深川」を使ったのです。以下に、清風の「深川十勝」題和歌を挙げてみます。漢詩の「涪溪十勝」題と一部の語句の異なる題もあるので、違う場合のみ「」内に涪溪十勝題を示します。番号は『月波楼集』掲載順です。

①大寧寺鐘

古の人の心は不可思議や治まれる世に峰の鐘の音

②獅子溪堂

我が誠堂を借りて照らさばや木下闇行く杖の音して

③興阿寺松

遊び来て撫づる老松幾千年昔の今は今の昔と

④千代橋月

橋柱名をも記して置かまほし月よりほかに知る人もなし

⑤布鼓幽栖

桃を食ふ仙人連に笑われん壁に面を小隠の僧

⑥射場台雨

危ふきを忘るる人の戒めに矢よりも激し夕立の雨

⑦亀浴山瀑布「亀浴山瀑」

湯浴みする亀見ても唯忘れなよ深き泉に潤へる身は

⑧高雄山新樹「高雄新樹」

世の中の移り変るは高雄山去年の紅葉は今日の若葉と

⑨信川水声

つれづれの伽とこそなれ夜もすがら老の枕に響く溪水

⑩ 小芙蓉雪

東路の高嶺の雪をうつし来て君が栄えを不尽と祈らん

せつかくですから、十勝題についてわかる範囲で解説してみます。ただ、わたくしにも不明のことが多く、長門市やその近隣に住まいの方でこうした方面に詳しい方からご教示いただけると幸いです。

①「大寧寺鐘」は先述の通り。長門市指定有形文化財の梵鐘には、応永三年（一三九六）「筑前州垣崎庄葦屋津長福寺」銘があるそうです。ただし、天保十三年（一八四二）頃の記事を記したとされる『防長風土注進案』（以下「注進案」と略）には、もう一つ、応安五年（一三七二）長州豊西郡（現在の豊浦郡あたり）の萬寿寺の銘を持つ梵鐘も存する旨、書かれています。こちらの鐘はどうなったのでしょうか。筑前芦屋は茶の湯の釜を初めとして古來鑄物の産地として名高かったので、応永三年銘の梵鐘を言ったのでしょうか。

②の「獅子溪」は大寧寺の前を流れる谷川（大寧寺川）。『注進案』に「大寧寺川 古名獅子ヶ谷」とあります。現在、長門湯本温泉を流れる音信川の源氏螢は天然記念物に指定されています。歌中の「木下闇」は鬱蒼と繁る夏の木立の下の暗がり。俳句では夏の季語として昼間の景を指すことが多いようですが、古歌では夏の夜を詠んだものもあります。清風詠はもちろん夜の景です。

③の「興阿寺」は『注進案』に依ると大寧寺の塔頭の一つ。「湯の畑に在」とされます。現在、装いも新たに変わった「恩湯」の裏の丘にひっそりとあります。

④の「千代橋」は、その恩湯のすぐ前に架かる橋。ただし近世後期にもこの場所に同名の橋が架かっていたかは不明。『注進案』では村内の橋九つが挙げられますが、地名に土橋・板橋などと付けて呼称としています。実際、村人にとっては「千代橋」などと風雅な名称は必要なかったでしょう。場所が特定できて他の橋と区別できれば生活の便に困らないわけです。清風の歌にも「橋柱に名をも記しておきたい。月より外に知る人もいない」とあり、千代橋がほとんど無名に近かったことを窺わせます。

⑤「布鼓」とは、大寧寺の塔頭の一つ布鼓軒のこと。隠居後の僧が入るとされ、谷川村にあって大寧寺二十一世寛周守廓和尚や同二十五世悦原芳欣和尚らが隠棲した旨、『注進案』に書かれています。

⑥「射場台雨」は、大内義隆の故事を踏まえた歌題。『注進案』に村内小名として「射場ヶ台」があり（現在もあるのでしょうか）、同書の「古戦場」の項に「三谷 攻ヶ原 射場ヶ台 今市原 いづれも大内家没落の時、戦の場所と申す事にて御座候ふ」とあります。先に挙げた『大内盛衰記』によると、義隆一行は瀬戸崎（仙崎）から乗船して鎮西の大友氏を頼ろうと企図しますが、突然黒雲強風が起こって「雷雨霹靂、天を落とす」状態となり大寧寺での自害を決定します。その最後の合戦地の一つが射場ヶ台です。

⑦亀浴山は未詳。そこに滝があったようです。清風の歌では「湯あみする亀」とあるので、大寧寺近くの源泉、もしくは温泉街近くに小さな瀑布があったのでしょうか。

⑧の高尾山は「高尾山」のこと。深川村役場発行の旅行案内『長門湯本温泉案内』（T13刊）に、「高尾山 湯本一帯の大観はここに尽きる。眺望にもって来いの山だ。湯本の西北部に小洞道がある。

その北方の入り口付近から登ると、一町ばかりで頂上に至る。まことによい見晴らしだ。(後略)以下、山頂からの景色を詳述しています。

⑨の「信川」は温泉街の中央を流れる音信川。漢詩題にふさわしく中国風に「信川」と音読したものです。もともと「信」の字には「手紙、消息」の意があり、「音信、家信」などの熟語を作っていました。古典の和語で「手紙」を表す言葉は「たより、おとづれ」などですから、「信」あるいは「音信」を「たより、おとづれ(現代仮名遣い)」と訓むことが可能なわけです。

⑩の「小芙蓉」とは温泉街の南東に位置する花尾山。本来、中国で芙蓉とは蓮の花のこと。白居易の『長恨歌』の一節「太液ノ芙蓉、未央ノ柳」が楊貴妃の美を表現したものとして著名で、『源氏物語』などにも使われています。富士山の美しさを蓮に喩えた表現が「芙蓉」です。あるいは、富士山の山頂火口(お鉢)を囲むように八つの峰があり、ちょうどそれが仏様の八葉蓮華座に見立てられることから、富士山の別名を芙蓉峰と言うなど、諸説あります。その芙蓉峰(富士山)の長門国版として、花尾山を小芙蓉と言ったものです。ちなみに、明治大学校歌の作詞者で社会主義詩・愛国詩で著名な児玉花外(父が深川村出身藩士のち医師)が大正十三年五月に当地に滞在しています。この時の作「深川富士」が、『防長新聞』同年五月二十二日版に掲載されています(現在、石碑が山頂に建立されているそうです)。新聞掲出時の総ルビのまま挙げてみます。

深川富士 児玉花外

一 深川湯本の南なる

山の王者の花尾山
山の工みか北齋の
筆が飛んだる墨絵富士

二 温泉の町近ければ

山も肌を紫の

空に曲線うつくしく

名所を誇る深川富士

一番の歌詞は北齋の錦絵「富嶽三十六景」を意識しつつも、逆に墨一色の枯山水のような雄姿をとらえます。それが逆に二番目の歌詞の色彩を浮かび上がらせる。「温泉の町が近いので、山もその出湯に浴したのか、山肌を紫色に染めあげて、大空に山の曲線が美しく映える……」。児玉花外の詩は、曙の花尾山が時の移ろいとともに紫色に染まっていく美しさを歌い上げますが、十勝題では雪を頂いた花尾山です。清風の歌は藩の貴人からの仰せを受けたものですから、「あなた様の弥栄を尽きることのない不戻(富士)として祈りましょう」と、寿祝の歌で納めます。

清風の一連の十勝歌は、人間の営為に興味を持ったうえで、深い自己観照に徹した歌もあります。ただ、はつきり言って何となく説教臭さが漂っていて、『露山集』の敬親歌が持つ自然体とは少し異なる気がします。本稿冒頭にお示しした、敬親の19番「千代橋月」歌も十勝題歌ですが、千代橋の上に立つて山里(長門湯本温泉)の興趣に浸りながら松の葉越しの月を見る、と素直に表現している。「橋柱に橋の名を記しておきたい」という清風歌は、わたくしには

何だか発想が役人臭くて息が詰まりそうに感じます。先に、敬親の養子順明（禎之丞）のことを述べましたが、もし清風詠十首が順明に献呈されていたのなら、この時、順明十四歳、清風七十歳。清風が将来藩主を盛り立てる立場の順明に、教え諭す気持ちも込めて教訓歌・道歌的に詠んだのかもしれない。それなら、堅苦しい詠みぶりも十分に理解できます。

さて、禁門の変（蛤御門の変）で長州側の四参謀として戦い、乱後に斬刑に処せられた宍戸真激（左馬之介）が、その処分を待つまでの謹慎中に纏めた家集に『間荒加多満』があります。この中に十勝題歌が四首見られます。宍戸の家集は『にほのうきす』が著名ですが、こちらには十勝題歌は入っていません。『間荒加多満』は写本が一冊現存するだけの珍しい家集ですから、そこから二首挙げましょう③。

大津の湯に御成の時、十勝の題の歌よめと仰せける中に

射場台雨

武士の放つ矢先の面影に篠を乱して夕立の降る

小芙蓉雪

雪積もる高嶺を富士と見渡せば夕居る雲や浮鳥が原

「大津の湯に御成の時」とありますので、これも毛利家のどなたかの来湯の際の詠歌です。先の清風と同じ時かもしれないませんがわかりません。

宍戸と同じく禁門の変で戦った家老福原越後（元圃）も、その家

集『緑浜詠草』で十勝題を三首詠んでいます。こちらは翻刻④がありますので、一首だけ挙げます。

興阿寺松

山寺の軒端の松の人ならば古りにし跡のことはましを

宍戸の歌、前者は篠突く雨に大内氏滅亡の合戦を幻として見たもの。後者は見立ての歌。福原の歌は古今集「住吉の岸の姫松人ならば幾代か経しと問はましものを」などに倣った素朴な詠みぶりの作です。

以上、敬親歌、清風詩歌、宍戸歌、福原歌と、「深川十勝（涪溪十勝）」題詩歌を見て参りました。

さて現在、この十勝題は、ほとんど忘れ去られているようです。というか、大正から昭和の時代、触れた著作もあったのですが、上述の著名な藩主・藩士たちの作ではなく、蝸牛洞居士なる隠者（？）の歌とともに、不完全な形で十勝題が引用され、歌意もつかみにくいまま等閑に付されたというのが現実のようです。簡単に諸書を見てください。

「深川十勝」の比較的古い解説として、『山口県大津郡会史』（12刊）があります。以下に掲出します。本文のやや不審な箇所・歌意のつかみにくい箇所は、右傍に線を引いてへ～内に正しいと推測されるものを併記しました。歌題番号は『月波楼集』のもので、両者で歌題が違う場合は「」内に『月波楼集』の歌題を付記しました。

陪・溪十勝（陪・溪は深川の里の名） 蝸牛洞居士

⑥ 射場夜雨「射場台雨」

むかし征矢の射場とし聞けば降る雨の音にも袖の濡るる夜雨かな

① 東廬山鐘「大寧寺鐘」

山の名の謂りは木々に埋もれつつ鐘の響きは世にぞ聞ゆる

② 獅子溪螢

谷の名はいと厳めしく聞こゆれど飛ぶや螢の影のやしきも

⑧ 高尾新樹「高雄山新樹」

日に添ひて茂る青葉の名にし負ふ高尾の峰も沈み捨てけり

⑤ 布鼓幽栖

ゆかしさよ今日この庵の人見れば憂き世の外の住居なりけり

⑦ 亀谷瀑布「亀浴山瀑布」

緑毛のかきの浴みせしこの滝のいとし万代かけて讚えめや

⑩ 小芙蓉雪

東路の空とな思ひ深川なる小富士の雪の光仰ぎて

③ 住吉台松「興阿寺松」

松風の音すみよしに来て見れば梢に千代のそぞろこほれる

⑨ 信川水降「信川水声」

川の名に背かじとてや行く水のおとづれ渡る岩根いはかね

これで全てです。そう、九題しかないのです。「千代橋月」題が欠落しています。『山口県大津郡会史』のこの部分は二百八十三頁で、ちょうど頁移り部分。恐らく、十番目の題と歌を印刷所が失念

してしまったのだらうと思います。また、「陪・溪十勝」という名称も誤植でしょう。「陪・溪」では意味を成しません。本来の「涪」の字は泡・水泡の意。湧出する温泉の流れ込む谷川を涪溪と呼んだのでしよう。村田清風を始め、当時の長州藩士の詩歌文集や日記類に「涪溪」は長門湯本温泉の意としてよく登場します。また、深川出身の長州藩士で詩文に秀でた平田新左衛門（淳）は、自らの号を「涪溪」としています。現在ほとんどどの原稿がワープロ作成で、電子データとして印刷所に回されますが、以前は手書き原稿を金属活字に組んで印刷していました。「涪」と「陪」、サンズイ偏とゴザト偏、手書き原稿だとなかなか判読が難しい場合もあり、それが誤植のもととなったのでしよう。なお、「蝸牛洞居士」なる歌人（隠者？）が誰をさすのか、皆目分かりません。ご存知の方、ご教示いただけたら幸いです。

このように、「千代橋月」題の欠落、「陪・溪十勝」という誤植、未詳歌人「蝸牛洞居士」、誤植による歌意のつかみにくい歌の存在などが相俟って、不幸なことに「涪溪十勝」題詩歌は、その後あまり取り上げられないままで終わったようです。『防長風土記』（S32刊）も「深川十勝（陪・溪十勝）」を立項して紹介していますが、『山口県大津郡会史』の転載で、九題・九首のみ（歌も同）。山口県立大学から『山口県文学年表 解説編・年表編』（H13刊）という労作が出版されています。この中の「長門地区の文学」では、「深川に「陪・溪十勝」を詠んだ、蝸牛洞居士がある」と紹介するのみで、もはや題も歌も記載されずに終わっています。

江戸時代になると、全国に「〇〇八景、△△十勝」といった名所

題が多数作られます。中国の瀟湘八景、琵琶湖の近江八景などに倣って、郷土の景物を誇る思い（郷土愛）が新たな名所題を創りだせたのです。近世後期、長州藩内にも多くの名所題が作られ、その詩歌が詠まれています。ここではそれらに触れませんが、「深川十勝」に関係する話を最後に一つ紹介しましょう。

村田清風は、俳句も作っています。その俳句に「深川温泉十二勝」と題する十二句があります。涪溪十勝題にあと二題が新たに加えられたのです。深川温泉（長門湯本温泉）の名所題として、清風がどうしても加えたかった二題とは、さて、何でしょう……。

高山春霽

晁旒にかゆる霞や高き山^⑤

三瀬陶煙

御代の春鞆の煙も二百年

温泉街から見上げる山々にかかる春霞と、深川萩^⑥を焼く三ノ瀬の登り窯の煙を清風は加えたのです。

〔注〕

(1) 中国江西省北部の山。主峰の漢陽峰ほか、奇岩秀峰の林立する景勝地。宗教の霊山でもある。「香炉峰」も諸峰の一つで、白居易の詩「香炉峰の雪は簾を撥けて看る」を踏まえた、「枕草子」での清少納言の当意即妙の対応が有名。

(2) 長門市史編集委員会編『長門市史 歴史編』(S56・12)

(3) 引用は山口県文書館蔵本。『間荒加多満』については、拙稿

「六戸真激の歌集『間荒加多満』について」(『桜文論叢』96巻、H30・2) 参照。

(4) 拙稿「資料紹介・翻刻」六戸真激『にほのうきす』福原元佃『緑浜詠草』——禁門の変に関与した長州藩士の歌集」(『桜文論叢』95巻、H29・6)

(5) 晁旒は、中国の高位高官が冠の前後に垂らしていた、玉を連ねた糸状の飾り。部下の瓊末な失敗を目に入れない象徴と言われる。「かゆる」は「変ゆ・替ゆ」。致仕した清風が、隠居の身となつて新たな思いで山々を眺めた時の感懐か。

(6) 萩焼は、文禄・慶長の役(一五九二〜九八)後に毛利輝元のみで朝鮮半島から渡来した陶工によつて始められたとする。その際、松本萩と深川萩の二系統に分かれた。毛利氏の治世のもと、二百年以上絶えることになった深川萩の煙を詠み、慶賀の句とした。

※『露山集』は版本、村田清風の作品は『村田清風全集』に依る。全ての引用和歌・詞書は、漢字並びに平仮名の濁点を適宜施して通読しやすい形に改めた。

〔付記〕

今月初旬、出張の途次、長門湯本温泉に一泊した。大寧寺境内を散策。苔屋で鑄造された梵鐘が案内小ぶりに驚いた。温泉街はとても綺麗に整備され各所に案内板が立てられていた。かつて二つあった共同浴場の礼湯と恩湯は、モダンな恩湯となつて生まれ変わり、礼湯跡には源泉の湧出のわかる工夫がされていた。広場から竹林の路(夜はライトアップされて幻想的)を登つて右手の御茶屋

通りに入ると興阿寺へ登る石段がある。庵寺のような本当に小さな興阿寺に参詣。老松を探したがそれらしきものは見当たらなかった。恩湯前の音信川に架かる橋には千代橋の名がくつきりと刻まれていた。かつて毛利敬親が松の葉越しの月を詠んだ橋であろう。位置的に言って、その松は興阿寺の老松だったのかもしれない。

地元の方に花尾山をご教示頂いた。富士山型の優美な山がひと際目立っている。大寧寺前の蛍のことを伺うと、最近では温泉街の音信川でも蛍の乱舞が見られるとか。幼虫は放流していないそうで、まさに自然のままの蛍である。

歴史遺産の保存維持と観光開発はなかなか両立しにくいと言われるが、長門湯本温泉では、よい形で未来に残していこうとする「街創り」を目にさせていただいた。コロナ禍の中、様々な点で苦戦している観光地が多い中、長門湯本温泉の更なる発展を祈念して当地を後にした。

(令和二年十月二十三日脱稿)
(おの・よしのり)